

特集
新年度企画



研究会活動紹介

中島 秀之 (公立はこだて未来大学/会誌編集長)

研究会からのメッセージをお送りする。初めての試みなので研究会ごとに温度差があるが、それを含めてメッセージだと思っていただきたい。こうして一覽してみるとなかなか面白いと思ったのは立案者(編集委員会)の臆目か? 好評であれば毎年定期的に続けていきたいと考えている。何度か続けるうちに安定した記述方式ができてくるかもしれない。

なお、記事の順序は学会 Web ページ (<http://www.ipsj.or.jp/kenkyukai/sig-info2012.html>) にならっている。ほぼ歴史的に古い(由緒ある?)順に並んでいる。

DBS

データベースシステム研究会

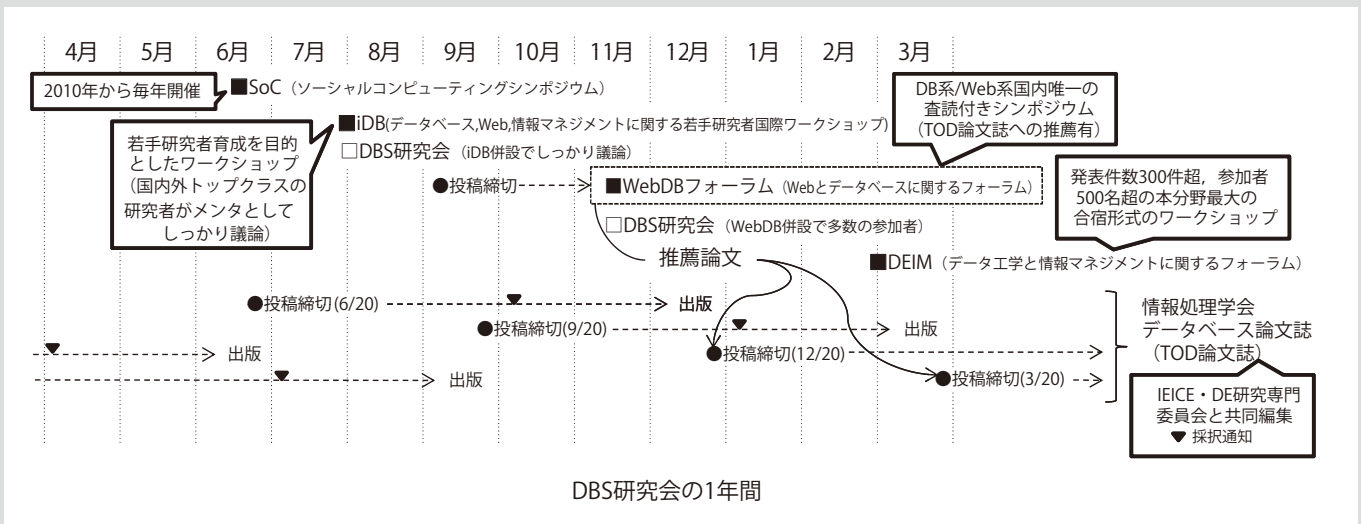
山名 早人 (早稲田大学)

データベースシステム (DBS) 研究会と聞いて何を頭に思い浮かべるでしょうか。昔ながらの「データベース」でしょうか、それとも最近流行の言葉で言えば「ビッグデータ」でしょうか。DBS 研究会は、Web の登場後、いち早く Web や検索エンジンにかかわる研究分野を取り込むとともに、最近ではソーシャルメディア解析を含め「膨大なデータに基づく広範なデータ処理技術と応用分野」をカバーするなど、広がりを持つ研究会です。そして、電子情報通信学会データ工学専門委員会、日本データベース学会、ACM SIGMOD 日本支部との密な連携をとり、本分野にかかわる年間行事を運営しています。

DBS 研究会は、1982 年から活動を行っており、2013 年 1 月現在の研究会登録者数は約 500 名です。年間のおおまかな行事を図に示します。毎年春に開催する SoC (ソーシャルコンピューティングシンポジウム) から 1 年がスタートします。夏に開催する iDB

(データベース、Web、情報マネジメントに関する若手研究者国際ワークショップ) は、トップクラスのメンタによる若手研究者の育成を目指しています。博士課程の学生、ポスドクだけでなく、企業の若手研究者を中心に参加があります。ここでの議論をもとに、トップカンファレンス、ジャーナルへの投稿を目指しましょう。また、併設の DBS 研究会においても、しっかり議論する時間を確保しています。

秋の WebDB フォーラムは、DB 系、Web 系で国内唯一の査読付きシンポジウムです。研究会やワークショップで鍛えたらぜひ投稿をお願いします。査読に基づき数本の論文を TOD 論文誌 (データベース論文誌) に推薦する推薦制度を取り入れています。また、多くの企業様にもご協力をいただき技術報告セッションや企業賞を設けています。冬の DEIM (データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム) は、参加者が 500 名を超える合宿形式のワークショップで、ここで発表することにより、幅広い分野の参加者にアピールすることができます。



SE

ソフトウェア工学研究会

岸 知二 (早稲田大学)

ソフトウェア工学は技術的あるいは管理的なさまざまな課題にかかわっていますが、本研究会は、これらのテーマを間口広く取り扱っており、実務者から研究者まで多くの方に会員になっていただいています。

研究会活動の柱は、年に4回開催している定例の研究発表会です。ここではさまざまなテーマに関して多様なバックグラウンドを持った人が研究発表や議論を行っています。会員は全国にいらっしゃいますので、4回のうち2回は東京、1回は関西、もう1回はそれ以外の地域で開催するようにしています。

一方、特定のテーマについて深く議論したい人のためには、冬に開催されるウィンターワークショップがあります。ここでは通常の研究発表会とは対照的に、セッションごとに定めたテーマに対して関心を持つ人が集まり、1泊2日で集中的な議論を行っています。温泉のある場所などで行われ、リフレッシュし

ながらよい議論をしていただいています。

さらに夏には研究会のフラッグシップイベントとしてのソフトウェア・エンジニアリング・シンポジウム (SES) を開催しています。ここでは論文発表だけでなく、基調講演、パネル、チュートリアル、ワークショップなど多様なイベントを行い、ソフトウェア工学に関心のある方にとって有益な場となるよう、毎年知恵を絞っています。

国際的な活動にも取り組んでいます。1994年にはアジア太平洋ソフトウェア工学国際会議 (APSEC) の創設にかかわり、その後1999年、2007年の日本開催では本研究会がホストとなりました。2013年度はソフトウェアプロダクトライン国際会議 (SPLC 2013) を主催することとなり、8月の開催に向けて準備を進めています。

本研究会は1977年に作られ長い歴史を持っていますが、古くから変わらない重要なテーマ、時代に応じた新しいテーマについての情報交換や議論の場となっています。ぜひご参加ください。



ARC

計算機アーキテクチャ研究会

佐藤 寿倫（福岡大学）

計算機アーキテクチャ研究会は、研究会活動の意義が登録会員の研究サポートにあるということを明確にするために、2010年度に以下の「理念と目標」を設定しました。

計算機アーキテクチャ研究会は、社会の基盤技術として重要な役割を担う計算機システムのアーキテクチャ研究を通じて、高度情報化社会における人類の繁栄に貢献することを、当研究会の理念と目的とします。

この理念と目的を達成するために、

1. 優秀な人材の育成を促進する（育成）
2. 研究者間の交流と協力の場を提供する（コミュニケーション）
3. 研究者の国際的なプレゼンス向上を支援する（国際化）

これらの「育成」「コミュニケーション」「国際化」のキーワードを掲げて活動いたします。

この「理念と目標」に沿うため、以下の方針で活動しています。

- ①育成：2010年度に「若手奨励賞」を開始しました。これまでの受賞者からは好評であり、若手の研究意欲向上に貢献しています。また、産業界からの講演等を実施することで、アーキテクチャ研究の意義を若手、特に学生に意識させることを狙っています。
- ②コミュニケーション：パネルディスカッションを実施するなど、研究会参加者が積極的に意見交換できる場を提供しています。また、会員にとって有益な研究交流の場を提供できるように他研究会との連携を強めるなど、柔軟な研究会運営を行っています。さらに、産業界の技術者が研究会に参加しやすいように開催形態を工夫しています。たとえば産業界からの招待講演を増やすなどして、産業界との連携を推進しています。
- ③国際化：国際会議でのアピール度を一層高めるための工夫をしています。採択を目指すためのパネルディスカッションや採択者による招待講演などを実施しています。

OS

システムソフトウェアとオペレーティング・システム研究会

河野 健二（慶應義塾大学）

5月号で紹介いたします。

SLDM

システム LSI 設計技術研究会

CS

■ 新年度企画 ■
研究会活動紹介

HPC

ハイパフォーマンスコンピューティング研究会

須田 礼仁 (東京大学)

HPC 研究会は「速いことはいいことだ」の合言葉のもと、高性能な情報処理を実現するためのハードウェア技術・ソフトウェア技術に興味がある会員が集まる研究会です。計算機業界の F1 と言われることがあります。短距離走だけではなく実は長距離走も守備範囲です。

近年、プロセッサのクロック周波数は伸びが鈍くなっており、今後も同様な傾向が予想されます。このため、プロセッサの性能向上の主たる方策は並列化です。今後 10 年程度で、100 コア程度を有するプロセッサが広く使えるようになるかもしれません。モバイル情報機器もマルチコア・メニーコアにより高性能化してゆきます。並列計算は情報処理に必須の技術となるでしょう。

並列プログラムで実際に高い性能を実現するためには、アルゴリズムの並列性だけでは足りません。

近年は、プロセッサの処理性能が高くなった分、性能を決める主たる要因がメモリ（主記憶、二次記憶）アクセスとなる傾向にあります。どうすればメモリアクセスを効率化できるかは、HPC 研究会に参加して発見してください。年 5 回の研究会、シンポジウム SACSIS と HPCS、論文誌 ACS が主な競技場です。

ここ数年、GPU を使った高性能計算である GPGPU がホットトピックとなっています。CPU とは異なる性能特性を持ち、大量のデータに同じ演算を施すような場合に高性能です。同様な演算加速プロセッサが開発されており、引き続き活発に研究が進められるものと思われます。

HPC 研究会には、より高い性能を出すためなら、どんな複雑なプログラミングも辞さないツワモノもいます。データ構造、アルゴリズム、特殊なプログラミング、並列化、ハードウェアなど、手段は選びません。巨大なスパコンだけではなく、PC やモバイルまで、「速くしたい」というハートがあれば対象も選びません。情報処理のアスリートの参戦をお待ちいたしております。

PRO

プログラミング研究会

増原 英彦 (東京大学)

プログラミング研究会 (PRO) は、プログラミング全般を対象とした研究発表の場で、1998 年度から毎年 3 ～ 4 回のペースで論文誌を発行しています。PRO 論文誌は研究会と密接にリンクしており、研究会で発表されたもののうちあらかじめ論文投稿を希望し、論文原稿を提出されているものが査読の対象となっています。

2012 年度は、第 89 ～ 93 回の研究発表会を開催し、合計 41 件の発表および活発な議論が行われました。

6月21～22日 小樽市民センター

8月3日 鳥取市尚徳町とりぎん文化会館 [SWoPP 2012]

10月30～31日 日本丸メモリアルパーク訓練センター

1月15～16日 鹿児島県奄美市 AiAi ひろば

2月28～3月1日 国立情報学研究所

このうち、第 90 回 (SWoPP2012) が他研究会との連続開催であり、残りの 4 回が単独開催です。

研究会論文誌に投稿された論文は、まず研究会で発表され、発表会の直後に開催される研究会論文誌編集委員会において議論し、査読者を定めて本査読を行っています。投稿の有無にかかわらず、1 件あたり発表 25 分、質疑・討論 20 分の時間を確保し、参加者が研究の内容を十分に理解するとともに、発表者にとっても有益な示唆が得られるようにしています。

CS

■ 新年度企画
研究会活動紹介

AL

アルゴリズム研究会

宇野 毅明 (国立情報学研究所)

研究会の活動ではないのですが、最近映像メディアでのアルゴリズムの露出が高く、その件を紹介したいと思います。アルゴリズムという言葉は、つい最近まで非常に専門性の高い言葉で、その世界の間しか存在を知らない、そういう言葉でした。ゆえに研究分野としてもそれに甘んじているところがあり、一般の方々への「アルゴリズム」というものの仕組みや面白さを伝える活動は、それほど盛んに行われてこなかったように思います。しかし研究を展開していく上で、アルゴリズムのような基本的な概念を説明するための上手な方法を知ることはもちろん重要です。分かりやすい解説や面白い例を見せるコンテンツがあるということは、分野の活動や意義を世間一般にアピールしていく上で大きな利点があるでしょう。

北海道大学湊真一教授の ERATO プロジェクトでは、社会還元活動の一環として、組合せの数を計算することがいかに大変であるかを見せる、アニメーションビデオを作成しました。n × n の格子状のネットワークに、左下から右上まで行くパスは何本あるか数える、というシンプルな問題です。この問題、高校の数学で出てくる「最短のルートのみを数える」という問題とは異なり、数式に数を代入する形で代数的に解く方法は現在のところ知られていません。一般の方から見ると「数式に代入すればいいんじゃないか」と映るようですが、それがだめとなると1本1本数えるしか直観的な方法はなく、それゆえにことの大変さ分かる、という仕組みになっています。アニメーションの方はかなり前衛的な笑いを伴うものとなっており、Youtube で 130 万ページビューを達成するなど、ブームを巻き起こしました。その後、この問題を独自に解く方々も一般の中から現れ、ネットに結果を投稿するなど、「アルゴリズムを考えることは、やりがいのある面白いことだ」ということをある程度認知してもらうことに成功しているようです。

また、2012 年のクリスマスイブには、テレビ東京系列にて「青春アルゴリズム」という番組が放映されました。通年、この番組は情報オリンピックに関す

るドキュメントを1時間放映していたのですが、今回はオリンピックに参加する人々についてのドラマを放映する、というかたちになりました。その中でアルゴリズムの簡単な説明が行われたのですが、そこで私、研究会主査の宇野の Web ページの内容（アルゴリズムというものの簡単な解説）が引用されました。これはいい機会だと考え、引用されたページから「チャレンジ!アルゴリズム」という、解いて面白そうな、簡単なアルゴリズムの問題を掲載したページを作って待機していました。放映終了後、多くの方がページを訪れたようで、2週間ほどで1,000 ヒットを達成しました。一般の方々から見れば、研究分野の最近の動向を知ることよりも、「面白いことを知りたい」という欲求のほうが高いと思います。それを的確に捉え、適切なコンテンツを提供することが、分野育成と認知のためには重要だ、と考えられるでしょう。

明けてお正月には、NHK 教育にて「大人のピタゴラスイッチ」という番組が放映されました。以前から NHK 教育の「ピタゴラスイッチ」では、比較的情報的な概念を含むコンテンツが放映されており、「アルゴリズム体操」「アルゴリズム行進」というコーナーも存在しています。「アルゴリズム」という言葉が世に出た最初のもの1つでしょう。「大人の～」では、少し内容を高度に設定し、普段の子供向けの内容を発展させ、情報学や認知科学のエッセンスを、なんだか楽しい内容で伝えようとしているようです。アルゴリズムの部分では「車掌の仕事（安全に運行するための手順）」「ダンゴムシが敵から逃げるアルゴリズム」「マージソート」「クイックソート」などが紹介されていました。

以前は「アルゴリズムなんて難しいものを、まして子供にも分かるように教えるのは無理」という空気があったように思います。確かに現時点でも教えることはできていないのですが、「面白さに触れる」ことはできているように思います。到達点をどのように設定するか、という点も含め、角度を変えているような視点で方法を探ることは、研究と同様に重要だと感じられる、今日この頃の変化でした。

CS

■ 新年度企画
研究会活動紹介

MPS

数理モデル化と問題解決研究会

小林 聡 (電気通信大学)

数理モデル化と問題解決研究会は、問題の数理的把握とモデル化、およびその有効な解決手法を開発することに興味を持つ研究者の交流の場として、1995年に創設されました。今は、研究会員数は350を超え、「数理モデル」をキーワードにさまざまな分野の研究者が集って活発な研究活動を行っています。

本研究会の一番の特徴は、門戸が広い点ではないかと思います。年5回の研究会を開催していますが、最適化アルゴリズム、進化計算、学習、データマイニング、画像認識、といった情報処理学会の他の研究会でも目にする研究テーマだけでなく、金融工学、経済物理、神経科学などの他の研究会ではあまり目にする事のないテーマの発表もかなり存在します。その意味で、自分の知らない新しい研究テーマを勉強できる場でもあり、同時に、異なる考え方をする研究者同士の素朴で本質的な疑問などをぶつけ合う場でもあります。そこから、新しい数理モデル

やその解決手法などが生まれてくることを望んでおります。

また、本研究会は情報処理学会のトランザクション「数理モデル化と応用」(TOM)を発行しております。これは、研究会の発表(発表は義務)と連動した論文誌です。研究会の約4週間前に論文を投稿してもらい、研究会当日に判定結果をお伝えするシステムになっております。編集委員が一丸となって迅速に査読プロセスを遂行している努力もあって、最近では、各研究会開催ごとに20件近くの投稿を得るまでになっております。数理モデルにご興味のある研究者の皆様におかれましては、ぜひ一度、本研究会でのご発表とTOMへのご投稿を検討いただけたら幸いです。

本研究会では、毎年7月の研究会はラスベガスで実施(英語での発表)し、毎年12月にはバイオ情報学研究会との合同研究会も実施しています。また、3月の研究会は、温泉地で行うことが毎年恒例になっております。まずは、全国の名湯・秘湯を楽しみながら、本研究会に参加されてみませんか?

EMB

組込みシステム研究会



CS

■ 新年度企画
研究会活動紹介

DPS

マルチメディア通信と分散処理研究会

勝本 道哲 ((株) 勝本総合研究所)

マルチメディア通信と分散処理研究会 (DPS) は 154 回の研究会を開催し、ワークショップも 20 周年を迎えるなど長年にわたり活発な活動を続けてきました。しかし、厳しい研究環境により、単なる研究発表の場だけとなってしまい、情報処理分野そのものの発展に向けた進歩的な議論がされなくなり、研究会本来の活動である、担当分野の発展のための研究会の役割が薄れていると感じていました。

そこで、まず研究会開催 150 回を機に研究分野にかかわる議論の時間を設ける新たな試みを 2 つほど始めました。1 つは主査レポートと題した自由な議論のための時間をプログラムに組み込みました。まだまだ、時間を十分に取れていませんが、後半には委員レポートの時間も設け徐々に議論の時間が増え、また、その効果が発表される論文にも反映され始めていると感じています。2013 年度もさらにこ

の時間を充実させていく予定です。そして、もう 1 つは合宿形式の研究会です。DPS 研究会では合宿形式のワークショップを開催していますが、そのミニ版とでも言いましょうか。ワークショップと違い合宿への参加は必須ではありませんが、研究会終了の時間を気にせず議論することができ、かつ、そのまま時間を空けずに懇親会を開催でき、研究のみならず学生にとっての研究生生活の面までの議論ができ有意義な時間を過ごしています。

そして、20 回目の新たなワークショップのスタートを開始しました。新しいワークショップは学生あるいは若手研究者をよりエンカレッジするために、ディナーテーブルセッションを開始しました。DPS 研究会には多くのアドバイザーがいますので、このアドバイザーと夕食を共にし、研究や研究生生活、それに将来に関してざっくばらんに議論するセッションです。運営側の苦労は多いですが、研究会の役割を十分に果たすのではないかと期待しています。まだ、始めたばかりの企画ですが、より充実した企画としていく予定です。

HCI

ヒューマンコンピュータインタラクション研究会

西本 一志 (北陸先端科学技術大学院大学)

ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI) 研究会は、2007 年にヒューマンインタフェース (HI) 研究会から現在の名称に改称いたしました。これは、当研究会が扱う研究分野の急激な拡大に伴う研究会の学際化に対応したものです。現在、情報処理技術や計算機科学に軸足を置きつつも、さらなる学際化を推進すべく、さまざまな試みを行っています。その 1 つが年に 5 回開催している研究会における招待講演であり、「分野違い」な研究者の方々をお招きしてご講演いただき、議論しています。たとえば、

- 第 147 回研究会では、東京大学医学部小児科学教室の中村嘉宏先生をお招きし、「臨床医学とフラクタル生理学」と題したご講演をいただきました。このご講演では、臨床医学における画像情報の役割についての概説の後、器官の形態は機能的必然性を伴うという考えからそのモデル化を行い、血流等の解

析を行う手法について解説いただきました。

- 第 148 回研究会では、琉球大学理学部海洋自然科学科の池田譲先生をお招きし、「艶やかな知者—イカの社会と『わたし』」と題したご講演をいただきました。このご講演

では、発達した神経系や感覚系を基盤として持つイカについて、その学習や記憶能力、社会性などに関する研究を紹介いただき、また自己鏡像認知の可能性などについて解説をいただきました。

- 第 150 回研究会では、東京大学大学院総合文化研究科の開一夫先生をお招きし、「母子間相互作用研



第 148 回 HCI 研究会の懇親会風景。招待講演講師の池田譲先生も交え、深夜まで活発な議論が行われました。

究からみた HCI」と題したご講演をいただきました。このご講演では、乳幼児を対象とした行動実験や脳活動計測によって人の認知発達能力の解明を目指す研究の紹介、その結果を基に学習を支援・促進する人工物の構想について解説をいただきました。

HCI 研究会は、今後も貪欲にさまざまな分野を巻き込み、学際的研究の一拠点として積極的に活動していく所存です。皆様のご参加・ご発表を心よりお待ちしております。

CG

グラフィクスと CAD 研究会

柿本 正憲 (東京工科大学)

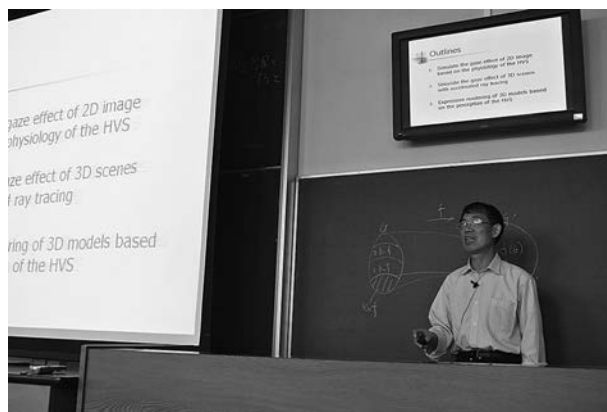
1981年にコンピュータ・グラフィクス研究会という名称で設立し、翌年の名称変更を経てすでに32年間にわたって継続的に活動しています。

• ハイレベルな投稿が集まるシンポジウム

1982年から始まったシンポジウムは、1997年より画像電子学会と合同で、2010年からは映像情報メディア学会も加わり「Visual Computing/グラフィクスとCAD合同シンポジウム」として毎年6月に開催しています。CG関連分野で国内最高水準の研究が査読を経て選ばれ、聴講者も例年多数集まります。大学のCG関連研究室の多くがこのシンポジウムに合わせて前年度成果の集大成を投稿します。登録会員には論文集DVDが送付されます。

• 質疑重視の研究発表会 (年4回)

研究発表会では、各発表に対して活発な質疑応答が行われます。以前はベテランの先生方の挙手が目立ちましたが、最近は大学院生や若い研究者からの質問も増え、喜ばしいかぎりです。率直な議論でお互い研究レベルを高めることは研究会の原点です。今後も質疑重視で、ジャーナル論文やSIGGRAPHを筆頭とする著名な国際学会での論文に発展する研究を後押しします。毎回の発表会では「GCAD賞」を選出し、優秀な研究発表を表彰しています。



中国浙江大学 Qunsheng Peng 教授による招待講演 (2012年6月第147回研究発表会)

• 関連組織との連携

CGは学際的な分野であり、秋の研究発表会は2年前からCVIM研究会と共催しています。また、研究以外の立場で活動するCG関連団体が数多くあります。2月の研究発表会は、CG検定で知られるCG-ARTS協会と共催で、「CGの教育」「CGによる教育」の発表も行われます。技術面で関連の深いゲーム業界の一大イベントであるCEDECでは、当研究会主体のセッションを開催しています。

• 今後は？

現在の悩みの種は、企業からの参加がかつてより減ったことです。企業の技術者が参加しやすくなるよう、新たな試みとして研究発表会で最新CG技術のチュートリアルを企画する予定です。ご期待ください。

IE

■ 新年度企画

研究会活動紹介

■



IS

情報システムと社会環境研究会

刀川 眞 (室蘭工業大学)

コンピュータなくして現代社会は語れません。ここで重要なことは、コンピュータは状況あるいは環境との相互作用があることです。相互作用の大きな相手はオペレータであり、オペレータの監督者であり、監督者を管理する者であり、その管理者のいる組織です。あるいはその組織とさまざまなやりとりをする人々（たとえばお客様）や、さらには社会にまで広がります。すなわち実社会の中でコンピュータは、人や組織あるいは社会という状況や環境に依存しているのです。

当研究会は、コンピュータや周辺機器などから構成される“情報処理システム”に加え、人・組織・社会とのかかわりを含めて幅広く“情報システム”として捉え、そのあるべき姿を探求しています。実社会とのかかわりを重視することから、活動メンバーは研究者や大学関係者だけでなく企業等で実際にシステム開発に携わっている人も多く、現場の眼、現場の知恵、現場の風にこだわっています。

具体的活動として年3回程度の研究発表会（うち1回は地方開催）に加え、若手研究者に対して



甲南大学での研究発表会のオプションとして実施したスーパーコンピュータ「京」の見学会（2012.9）

これからの研究を奨励する「若手の会」の開催、物理的なモノを対象とする通常の理工系論文とは趣が異なる情報システム論文の執筆促進に向けた「チュートリアル」の実施、当研究会を編集母体とする情報システム関連のジャーナル特集号の発行、「IS デジタル辞典—重要用語の基礎知識」の編集および学会サイトでの公開、情報システム研究の質的アプローチも対象とする情報システムの有効性評価ガイドライン策定WGなど、多角的・精力的に活動しています。興味や問題意識をお持ちの方は、ぜひ本研究会に参加ください（<http://ipsj-is.jp/>）。

IFAT

情報基礎とアクセス技術研究会

関 洋平 (筑波大学)

情報基礎とアクセス技術研究会は、2010年に前身の情報学基礎研究会から改称し誕生した新しい研究会です。本研究会では、情報アクセスシンポジウムを年1回開催しており、2012年度は、国立情報学研究所において12月に開催され、1件の基調講演、2件の招待講演、3件のワンポイントセミナー、5件の査読つき一般講演発表、IFAT ヤングリサーチャー賞表彰式と、盛りだくさんのイベントが行われ、多数の方に参加いただきました。基調講演は、加治佐俊一氏（マイクロソフトディベロップメント社長・日本マイクロソフト CTO）から、「ユーザーインターフェースの進化とアクセシビリティ」というタイトルで、Natural User Interface に向けた発展、Kinect for Windows について、講演をい



IFAT ヤングリサーチャー賞 表彰式の様子

ただき、大変盛り上がりました。招待講演は、村上明子氏（IBM 東京基礎研究所）から、「分析技術が

IE

■ 新年度企画
研究会活動紹介

創り出すレジリエントな社会」というタイトルで、通常時と非常時のソーシャルメディア分析・活用のシナリオについて、講演が行われました。また、井手一郎氏（名古屋大学）からは、「大規模放送映像アーカイブの構造化と映像再編纂」というタイトルで、ニュース映像アーカイブにおけるトピックスレッド構造の分析や、映像の再編纂について講演が行われました。ワンポイントセミナーでは、若手研究者2名による国際会議 ACM SIGIR における発表に向けたアドバイスや、2012年度行われた2件の国際ワークショップからの今後の情報検索研究に向けた知見、あるいはデジタルライブラリ研究の方向性について、 세미나講演が行われ、大いに盛り上がり

ました。一般講演発表では、テストコレクションの構築に向けた考察や、Twitter、ブログを活用した利用者分析や言語コーパスの構築、子供向け検索トピックの調査、異ページ間コミュニケーション検索システムなど、幅広い研究について活発な議論が行われました。また、学生を対象としたメンタリングに基づく論文の改善にも取り組んでおり、大変好評でした。

このシンポジウムに興味をお持ちの方は、ぜひ本研究会にご登録ください。2013年度は情報検索のサマースクール（ASSIA）の開催も予定しており、当研究会の参加者には、それぞれ割引特典があります。

AVM

オーディオビジュアル 複合情報処理研究会

井上 雅之 (NTTメディアインテリジェンス研究所)

本研究会は、人間に最も優しい情報処理・通信・インタフェースを求めて研究活動を進めるもので、画像信号処理、HDTV信号・システムの活用、高品質音声処理・音場処理等をスタートとして、マルチメディアの有機的・総合的活用を実現するハイパーメディア場への進展を積極的にサポートするものである。これらの分野にかかわりの深い研究会との協調を持ちながら、本研究会で適切な課題設定をもって研究紹介の効率化をはかり、実用から最先端までの研究者の積極的交流の場とすることにより、技術進歩の加速をはかることが大きな目的である。本研究会はこのような背景で1993年4月に設立され、毎年、4回の研究会と1回のシンポジウムを開催している。

4回の研究会のうち3回は他の研究会と連催、共催という形で研究会を運営することで、効率的な運営と関連研究者間の活発な交流を促進する試みを行っているところである。たとえば、2012年12月に福井で開催された研究会は、電子情報通信学会通信方式研究会（IEICE-CS）、画像工学研究会（IEICE-IE）との連催、映像情報メディア学会放送技術研究



第79回オーディオビジュアル複合情報処理研究会の開催風景

会（ITE-BCT）との共催研究会であり、2日間で32件の論文発表があった。大学、通信業界、放送業界、家電業界などから50名以上の参加者があり、活発な議論がなされた。

さらに、グローバル化の進展に伴い、研究会の立ち位置を従来の「ジャーナルへまとめる前の関門」という位置づけから、「国際会議へ投稿する前の関門」と再定義し、インパクトファクタの高い国際会議に関する特別講演を積極的に行っている。2011年2月には国際会議 ACM マルチメディア、2012年12月には国際会議 ICIP に関する特別講演を実施し、近年内向きといわれる若手研究者へ向けてメールを送った。

GN

グループウェアとネットワーク
サービス研究会

小林 稔 (NTT サービスエボリューション研究所)



研究会ロゴ (20周年版)

「グループウェア研究グループ」として発足してから20年目を迎えた2012年、20周年記念シンポジウムを開催した。Yahoo! JAPAN

研究所のサービスに貢献する技術開発、ベンチャーから立ち上げ Web 会議でアジアシア 1 位を目指すブイキューブの戦略、CSCW、HCI 分野の日本のプレゼンス向上のための方策、ソーシャル・エクスペリエンスへと転換する現代サービス研究開発、等に関する講演を通じ、今後の活動を考える多様な視点が示された。初代主査の松下温先生から、グループウェアはすでにビジネスの話だからやることないのでは？との問題提起がなされたが、Twitter や Facebook など、社会に新しいコミュニケーションの形が次々と現れる今日、課題が尽きない等の意見があり、新しい視点で研究分野を開拓する努力を続けることが必要であるとの意見でまとまった。

アイデアの他家受粉を促し新たな着想を得る機会の提供は研究会の重要な役割だが、そのために GN 研究会では、年 4 回の研究会と 1 回の泊まり込みのワークショップ、2 回の合同のシンポジウム、隔年の国際会議を開催している。泊まり込みワーク



甑島での朝食

ショップや、屋久島や甑（こしき）島等の島の研究会には色々な思い出がある。

2011 年に開催した甑島は Dr. コトーのモデルになった島だ。港のホテルと一緒に泊まり、近くの公民館で開催した。島の独特の地形による景色もさることながら、停止線に止まり信号待ちをする自転車、出会えば挨拶してくれる島の皆さんの様子が印象的だった。研究会では「仮想世界錬金術」の話題で盛り上がったのだが、純朴なコミュニケーションとネットサービスによる錬金術の間に大きなギャップを感じた。ネット時代のコミュニケーションを扱う我々が、人の本質について悩む良い機会を与えてくれた。

ところで、甑島までは飛行機、電車、バス、船を乗り継ぎ丸 1 日かかった。苦勞をかけた参加者の皆さんには本当に申し訳なかったと思っている。しかし、朝食の地物の魚のバイキング（テーブルで焼いて食べる）が忘れられず機会があれば再び訪れたい。皆さんからの要望が高まることを期待している。

DD

デジタルドキュメント研究会

高橋 慈子 ((株) ハーティネス)

デジタルドキュメント研究会 (DD 研) は、「ドキュメント」に関して多面的な視点、多様な立場から、熱く語っています。たとえば、「ドキュメント」をどう定義する？コンテンツやデータとの違いは？という、扱う対象についての議論が、運営委員会ではしばしば繰り返されます。まさに、これが DD 研らしさ。

文書の電子化が進み、デジタルドキュメントの範囲が大きく広がっています。特にソーシャルメディアまで含めると、電子化以前とは比べようもないほ

どの広がりです。たとえば 2012 年の旬の話題ならば、電子書籍端末が次々と登場し、デジタルドキュメントの流通の仕方、読み方が変わりつつあります。このような状況のもと、どのように文書情報を構造化し、作成、運用、再利用していくのかは、分野が異なっても共通の関心事です。

専門分野や領域が異なり、視点が違えば、意見も異なるもの。研究会の質疑応答、コメントの時間は、熱く意見を交わし合う、いわば異分野格闘技のような様相を呈することも。そこがまた、DD 研らしさでもあり、知的刺激を受ける楽しい時間です。質疑応答の時間を多く取り、多様なフィードバックを持ち帰れる場になるよう配慮しています。発表者と参

加者が交流できる場として、研究会後の懇親会を用意しているのも特徴。話が尽きず、終電まで…となることも。

デジタルドキュメントは、確立した学術領域があるテーマではありません。テクニカルコミュニケーション、文書の構造化・部品化、企業の製品・サービス情報の提供、地域・観光情報の編纂、電子書籍、グローバル化のための多言語ドキュメントなどの分野の研究者や実務家が参加しています。テーマによっては回を重ね、議論を深めています。2013年1月に取り上げたテーマ、「より“使える”ドキュメントへ：品質向上とマルチユース展開の技術」は、テクニカルコミュニケーションを中心として深めているテーマです。構造化文書の最新動向やユーザエクスペリエンスを文書にどう取り入れるかが語られ、議論が盛り上がりました。

ドキュメントは、誰もが作り、読み、活用するもの。響いたタイトルの研究会のお知らせを見かけたら、ぜひ、ご参加ください！



DD 研 研究会風景

MBL

モバイルコンピューティングと ユビキタス通信研究会

太田 賢 ((株) NTTドコモ)

モバイルコンピューティングとユビキタス通信研究会（以下 MBL 研究会）は、1997年に発足し、2013年で17年目を迎える。対象領域はモバイルシステムやアプリケーション、モバイル/ユビキタスネットワークを中心とし、その周辺・融合分野まで幅広くカバーする。MBL研究会の最近の活動として、デモ・ポスターセッションと、主催国際会議 ICMU の2つを紹介する。

第1に、新たな試みとして、2012年8月の第63回研究発表会ではプロトタイプ展示や Work-in-Progress 段階の研究紹介向けにデモ・ポスターセッションを設けた。企業と大学から、傷病者の位置・生体情報可視化システム、WiFi ベースタグシステム、災害時のユーザ行動シミュレーション、バスロケーションセンサシステム、多画面連携システムの計5件のデモが展示された。動いているモノを実際に見ながらの突っ込んだ議論は盛り上がり、参



デモ・ポスターセッション風景

加者間のカジュアルな交流も深まった。当日夜の懇親会での、面白かった、またやりたいとの声を受け、2013年度はより充実させたセッションとする計画である。

第2に、モバイル・ユビキタスに関する国際会議 ICMU について、6回目となる2012年は、例年5月に沖縄で開催している研究発表会（多くの人がかりゆしウェアで参加する）と連続した日程で開催した。ネットワーク・モバイル系の研究で著名な

UCLA の Mario Gerla 先生からウィットに富んだ招待講演をいただくとともに、発表会場やバンケット会場では熱い議論が交わされた。天候にも恵まれたので参加者は会議だけでなく、沖縄のスカイブルーと美ら海も同時に楽しんだことと思う。

MBL 研究会は 2012 年から Facebook ページも開設しており、活動の歴史がタイムラインにまとめられている。当研究会に興味を持った方はぜひアクセスいただきたい。

CSEC

コンピュータセキュリティ研究会

寺田 雅之 ((株) NTTドコモ)

コンピュータセキュリティ (CSEC) 研究会は、コンピュータのシステムやサービスを「安全に」動かすための技術について、基礎となる理論・技術から、実応用への適用方式やその事例、さらに社会科学的考察までを含めた、包括的な研究の場の提供を目指しています。主な活動として、年 4 回の研究発表会のほか、10 月にコンピュータセキュリティシンポジウム (CSS) を、11 月に Intl. Workshop on Security (IWSEC) を主催しています (IWSEC は電子情報通信学会 ISEC 研究会との共催)。

CSS は、およそ参加者 400 人、発表数 150 件を集める学術シンポジウムです。2013 年は 10 月 21 ~ 23 日に高松で開催されます。マルウェア対策に焦点を当てたワークショップ (MWS) を併催しており、産官学の研究者だけでなく、実務現場でマルウェアと戦っている技術者も多く集まる、研究と実務の交流の場ともなっています。また、開催初夜の CSS キャンドルスターセッション (CSS x2.0) では、第一線の研究者・技術者による本気の joke プレゼ

ンテーションが競われます。観るだけでも楽しいですが、ここはぜひ * 挑戦者求ム *。

IWSEC は、日本で継続的に開催されている唯一のセキュリティに関する国際会議です。2013 年は 11 月 18 ~ 20 日に沖縄で開催されます。セキュリティの理論と実用の両面がスコープですが、2013 年からは実用をより重視して「ケーススタディや実装事例」についても積極的に採録する方針です。システムやサービスを実現する上で安全やプライバシーをどう保護すべきか、という頭の痛い問題に取り組んだ経験は、きっとほかの皆さんにも役立ちます。役立つ論文は採録されます。投稿締切は 5 月 13 日です。多様な分野からの投稿をお待ちします。

IT システムが便利になっていくにつれ、セキュリティの重要性もまた高まるばかりです。CSEC は年 2,625 円で研究会登録会員になれます。2 回の研究発表会聴講で元がとれるお得な計算です。学生の方は 1 回 500 円で聴講できますので、ぜひ一度お試しにどうぞ。「攻めと守り」の両方の技術を押さえている、というのは強みですよ? 詳しくは <http://www.iwsec.org/csec/> をご参照ください。お気軽な参加をお待ちしております。

ITS

高度交通システム研究会

屋代 智之 (千葉工業大学)

ITS 研究会は来たる高度交通システム社会へ向け、自動車交通に限らず、交通の諸問題を解決するために 1998 年に研究グループとして発足し、2000 年に研究会となりました。その間、スマートフォンを含む携帯電話の進歩、情報処理技術の飛躍的な発展がありました。また、道路交通環境においてもナビや VICS などの発展、ハイブリッド車の普及など大きな変革が起こりました。ITS 研究会はこのようなさまざまなフィールドで活躍されている研究者の

意見交換、交流の場を作り、技術の発展に寄与することを目的として活動しています。研究会としての主な活動には、年 4 回開催の研究発表会と、毎年 1 月 (2013 年は 3 月) に開催している ITS シンポジウムがあり、ほかに論文誌の特集号 (年 1 回、MBL 研究会と合同) と DICOMO シンポジウムの共催などを行っています。

ITS 研究会の特徴として、さまざまな技術の「目的」をベースとしている点が挙げられます。このため、使われる技術は情報処理分野だけでも多岐にわたり、研究者にも幅広い視点が求められます。そこで、研究会としてはなるべく多くの分野との交流を図れる

ようにすることを考えています。もちろん、これは簡単にできることではありませんが、できれば（究極的には）、ITS 研究会に参加しているだけで、いくつもの研究会や団体に入っているのと同じような情報などが手に入る、ということを目指しています。

そのため、ITS シンポジウムではテーマとして毎年注目すべき関連技術を取り上げています。また、研究発表会の一部は MBL 研究会との共催や他の学

会の ITS 研究会などと共催／連催にしています。今後ともこのような機会を増やし、なるべく幅広いトピックを扱えるようにしていきたいと考えています。

さらに、企業の研究者が参加しやすいように、研究発表会を土曜日に開催することも試験的に始めています。ぜひ、皆様の活発な参加をお待ちしております。

UBI

ユビキタスコンピューティングシステム研究会

角 康之（公立はこだて未来大学）



ユビキタスコンピューティングシステム研究会 (<http://www.mkg.sfc.keio.ac.jp/UBI/>) は、2003 年 4 月からスタート

した比較的若い研究会です。2001 年 4 月に設立された「情報家電コンピューティング研究グループ」と「知的都市基盤研究グループ」が母体となって設立されました。研究分野は、家庭、オフィス、自動車といった身の回りの生活空間から都市空間まで幅広い対象に対して、ユビキタスコンピューティングの基盤技術であるコンピュータアーキテクチャ、センサ、ネットワーク、入出力デバイス、ヒューマンインタフェースの話題を扱っています。

普段の活動は、年に 4 回のペースで研究発表会を開催し、2012 年度までに 37 回を数えています。多くの場合、情報処理学会内の他研究会との共催や、電子情報通信学会の研究会との連催を行い、積極的

に周辺分野の研究コミュニティとの交流を行っています。また、シンポジウムとして「DICOMO」と「インタラクション」の主催に携わっています。学会論文誌では、3 回の特集号を発行してきました。

国際的な活動としては、ユビキタスコンピューティング分野の重要国際会議である Ubicomp を 2005 年に東京で、Pervasive を 2009 年に奈良で開催する際に、本研究会のメンバが中心になって運営を行いました。また最近では、「Interaction with Smart Artefacts」をテーマとするドイツとの 2 日間研究者交流のワークショップにも多くの研究会メンバが参加しました。

研究会の役割は、最新の研究成果を迅速に共有するとともに、研究コミュニティを育てることが重要だと考えられます。そこで本研究会では、各研究発表会ごとに優秀論文賞と学生奨励賞を選定しています。また新しい試みとして、研究会で発表された内容で関連国際会議に採択された学生発表者の会議参加および渡航の費用を補助するプログラムを始めました。引き続き、皆様の活発なご参加をお待ちしています。

IE

■ 新年度企画

研究会活動紹介

■

IOT

インターネットと運用技術研究会

山之上 卓 (鹿児島大学)

インターネットと運用技術研究会は2008年に分散システム/インターネット運用技術研究会(1996年発足)と高品質インターネット研究会(2001年発足)が統合してできた研究会で、4年あまり活動を行ってきました。2013年度には、近年、少しずつ研究発表内容に重複が生じてきた、システム評価(EVA)研究会と統合される予定です。本研究会は情報インフラの高度化・高性能化およびその構築や管理運営など、情報化社会の基盤を担う部分を研究分野とし、その成果は、企業や大学などでその組織の情報基盤の高度化に貢献しています。また研究者・システム管理者の知識や技能の共有を図ることで、研究と実際のシステムの運用で得られた知見を互いに反映してきました。今後、EVA研究会と統合されることにより、それぞれの研究会で行われていた特色ある研究を双方の登録会員が知ることにより、新しい研究が次々と生み出される可能性もあります。過去4年間の研究会の活動状況を表-1に示します。

本研究会は表-2に示すシンポジウムを主催し、表-3に示す論文誌の特集号を担当しています。これらの活動は、本研究会の研究分野に携わる技術者・研究者のキャリアパス開発にも役立っています。このほか、本研究会はDICOMOシンポジウムを共催しています。過去3回、国際会議SAINTのワークショップも主催しました。2013年度からはこのワークショップと他のSAINTのワークショップが統合され、ADMNET (Architecture, Design, Deployment and Management of Networks and Applications) というワークショップがCOMPSACで開催される予定です。また、2012年10月にメンフィスで開催されたACM SIGUCCS (SIG University and College Computing Services) ではIOT研究会の登録会員らによって、大学の大震災発生時および

年度	実績会員数	開催回数	発表件数	平均参加数
2008	468	4	99	67
2009	405	4	48	63
2010	404	4	49	63
2011	385	4	71	53

表-1 研究会活動状況

年度	テーマ	投稿数	採択数	招待講演	パネル討論	参加者数
2008	多様なネットワークサービスの統合・連携にむけて	23	18	2	1	115
2009	仮想化時代のインターネットと運用技術	18	15	3	1	77
2010	ディペンダブルなシステムの構築を目指して	17	16	3	1	84
2011	危機管理の視点から運用技術を考える	14	12	2	1	65
2012	クラウド時代におけるオーバーレイによる技術の有機的結合	16	15	3	1	64

表-2 シンポジウム

年度	テーマ	投稿数	採録数
2008	柔らかなサービスを支えるインターネット技術/分散システム運用・管理技術	40	11
2009	多様なネットワークサービスの統合・連携に向けたインターネットと運用管理技術	27	9
2010	仮想化時代のインターネットと運用技術	19	7
2011	ディペンダブルなシステムの構築・運用・管理技術	19	7
2012	危機管理の視点を考慮したインターネットと運用技術(予定)	25	13

表-3 論文誌特集号



図-1 2012年12月に鹿児島大学で開催されたIOTシンポジウムの招待講演の様子

その後の対応の経験、IOT研究会の紹介などの発表が行われました。2012年12月には、セキュリティ心理学とトラスト研究会と共同で災害コミュニケーションシンポジウムを共催し、大震災の教訓や対応策などについて情報交換を行いました。図-1に2012年12月に鹿児島大学で開催されたシンポジウムの招待講演の様子を示します。

SPT

セキュリティ心理学とトラスト研究会

村山 優子 (岩手県立大学)

SPT 研究会では、これまで技術中心に捉えられていた情報処理分野の中で、人間がかかわる観点を中心に見ています。セキュリティでは、技術的な対応を行うことで安心な環境を利用者に提供できると考えられていました。しかし、本当に利用者は、技術提供だけで安心するのでしょうか。セキュリティ心理学はこうした利用者の心理にかかわる研究分野を指します。一方、攻撃者の中には、ソーシャルエンジニアリングと呼ばれる、人間の弱点や隙を利用してパスワードや個人情報などを盗む者もいます。これは、従来のシステムやネットワークに対する直接的な攻撃ではなく、人間を利用した攻撃です。以上のことから、本研究会では、セキュリティだけにとどまらず技術一般に関するヒューマンファクタや心理学的観点、安全工学やトラスト等の学際的領域を対象とします。

欧米でも、技術に関する人間的側面が注目され始めました。セキュリティとヒューマンインタフェースの分野の新たな国際会議、Symposium on Usable Privacy and Security (SOUPS) は、カーネギーメロン大学の Cylab のメンバが中心に企画し、注目を集めています。本研究会では、SOUPS で発表された論文の勉強会を 2 年前から始めました。

さらに、日本での「安心」に似た概念を、欧米で



災害シンポジウムの講演風景 (2012 年 12 月 20 日東京理科大学にて)

は「トラスト」と呼び、これまで、哲学、社会学、心理学、経済学等の分野で研究が進められてきました。1990 年代に入り、欧米の情報科学の分野でもトラストが研究され始めました。Dependability(高信頼性)とも似ています。

トラストの応用分野として、災害コミュニケーションや災害情報処理も本研究会で推進する研究課題です。2 年前より、毎年 12 月に災害関連のシンポジウムを始めました。災害の復旧、復興、防災、減災は、災害に関する技術だけでなく、人間的観点を重視した情報処理の実践的な応用分野です。

以上、本研究会では、技術の人間的側面を多角的に考え、ホットでタイムリーな課題にも柔軟に取り組んでいきます。ぜひ、SPT 研究会にご参加ください。

CDS

コンシューマ・デバイス&システム研究会

石川 憲洋 (駒澤大学)

CDS 研究会は 2011 年度に発足した新しい研究会です。近年のスマートフォン、タブレット端末、ソーシャルメディア、電子書籍などの急速な普及とともに、コンシューマ・デバイスおよびサービスは大きな発展を遂げ、我々の日常生活を支える社会インフラとして大きな役割を果たしています。しかしながら、残念なことに、この分野では近年、大学などの研究機関、産業界は大きな役割を果たしていません。

このような状況を打開するために、本研究会は、大学などの研究機関と産業界が意見交換する場を新たに設け、互いに協力して、本来、日本の得意分野であった、コンシューマ・デバイスおよびサービスの分野で、再度、世界をリードすることを目的として設立されました。本研究会では、「研究のための研究」ではなく、実サービスを提供するために構築されたシステム、およびその基盤となる技術を扱った論文などを特に歓迎しています。大学などの研究機関からは、次世代のコンシューマ・デバイスおよびサービスを目指した斬新なプロトタイプ開発、およびその基盤技術に関する研究を期待しています。特に、2013 年度は、学生の研究支援、活性化を目

IE

■ 新年度企画

研究会活動紹介

■

的として、「スマートフォンのセンサ機能を活用した次世代アプリケーション」などをテーマとした学生コンテストも企画予定ですので、積極的な参加をお願いします。また、本研究会のもう1つの特徴として、同時に発刊したCDSトランザクション（論文誌）との密接な連携があります。CDS研究会で発表された優れた論文は、CDSトランザクションに推薦する制度があり、研究会発表後、最短で半年程度で、CDSトランザクションに掲載されます。

加えて、本研究会では、学会の国際化に向けて、国際学会との連携にも力を注いでいます。本研究会発足時には、本研究会と関連が深いIEEE Consumer

Electronics ソサエティ会長（当時）のS. D. Dukes氏から祝辞をいただき、2012年10月に幕張で開催されたIEEE Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2012)では、特別セッションを企画、運営しました。また、2013年7月に開催されるIEEE COMPSAC 2013に併設してCDSワークショップを開催予定です。

コンシューマ・デバイス&サービスの分野の研究開発の活性化に向けて、産業界との連携、学会の国際化への貢献に重点を置いて活動を進めている本研究会へのご理解、ご参加をよろしくをお願いします。

DCC

デジタルコンテンツ クリエイション研究会

小川剛史（東京大学）

デジタルコンテンツクリエイション（DCC）研究会は2012年度に発足した新しい研究会です。本研究会では、前身の放送コンピューティング研究グループの対象であった情報配信技術のようなインフラ的分野から、そのインフラを用いて配信していたコンテンツに対象を移し、デジタルコンテンツの制作・流通・利活用を促進するための情報技術のみならず、コンテンツビジネスや著作権、コンテンツ自

身のアート・エンタテインメント性の観点からの表現技術など、デジタルコンテンツにかかわる幅広い分野を研究の対象としています。また研究会を、情報技術者とクリエイターやアーティストが出会う場、情報交換の場として提供できるよう活動しています。2013年度からは「情報処理学会論文誌：デジタルコンテンツ（DCON）」を発刊する予定にしています。従来の研究論文に加え、産業論文、作品論文といった新たな論文カテゴリを設け、独自性の高い論文誌を目指しています。ぜひ、DCC研究会への参加とDCONトランザクションへの投稿をお願いします。



NL

自然言語処理研究会

徳永 健伸 (東京工業大学)

自然言語処理研究会では研究会の活性化を目的としてさまざまな取り組みをしています。本稿では、そのいくつかを紹介します。

1. 学生奨励賞の授与：毎年5月は音声言語情報処理研究会と共催を行っています。この回には学生の発表のみを集めた学生セッションを設け、優秀な学生の発表2～3件に対して学生奨励賞を授与しています。賞の選考にあたっては、学生セッションでの発表を新規性、有効性、正確さ、プレゼンテーションなどの観点から研究会参加者に採点してもらい、その結果をもとに両研究会の主査・幹事で総合的に判断して決めています。

2. 研究会の質疑のサマリの公開：発表の後に行われる質疑応答は研究会の重要な要素です。研究会では、基本は20分の発表に対して10分という十分な質疑応答の時間をとっています。発表内容については研究会報告に掲載される論文を読めば分かりませんが、発表後の質疑応答については研究会に参加し

た人しか聞けません。時間的な制約で研究会に参加できなかった人のために、196回(2010年5月)より、毎回、すべての発表について主査・幹事で質疑応答のメモを作成し、それをもとにサマリーを作って研究会のWebページ(<http://www.nl-ipsj.or.jp>)で公開しています。

3. 国際会議の報告：2011年度から主要な国際会議の後に、会議に参加した方数名にお願いして会議の報告を行う特別セッションを開催しています。採択率、論文のトピック分布や国の分布、参加者数など、会議全体についての概要を報告いただいた後、各自が興味深いと思った論文を数件紹介いただきます。単に論文の内容を紹介してもらうのではなく、紹介者が面白いと思った理由やもの足りないと思った点など、論文の評価も含めて話をさせていただくようお願いしていますので、会議に参加できなかった人にとって非常に有益なセッションであると思います。また、報告を依頼している方々も第一線で研究されている若手の研究者なので、毎回、非常に質の高い報告となっています。

ICS

知能システム研究会

栗原 聡 (大阪大学産業科学研究所)

当研究会は、本会における人工知能研究分野を担当する研究会として長い歴史を有しております。また、2010年から名称をそれまでの「知能と複雑系研究会」から「知能システム研究会」に改名しました。

ビッグデータ、スマートグリッド、ソーシャルメディアなど、インターネットという「複雑ネットワーク」を基盤とした、次世代情報社会インフラのための新しいテーマが続々と生まれつつある現在において、人工知能技術への期待感も高まりつつあります。データは収集するだけでは宝の山であり、その中から鉱脈を見つけ出すデータマイニングや、無駄のないエネルギー循環システムを構築するには、大規模自律分散システム制御が不可欠であり、そのためには自律システム間での知的協調が要となります。3.11の大災害を教訓とした防災・減災に向けた情

報インフラ整備においても、デマや流言の拡散防止や、的確な情報を的確に配信するためのシステムなどにおいても人工知能技術は不可欠です。

このような状況の中、当研究会においては、主査・幹事がその時の旬なテーマ、さらにはこれから注目されるであろうテーマに敏感に反応し、情報系他学会において複数存在する類似研究会の中においても、常に新規分野の開拓や魅力あるテーマでの研究会をいち早く開催するよう努めております。それと同時に、類似研究会が独立に研究会を開催する今日の状況は、多様性を生み出すものの、参加者にとっては決して好ましいことではないということから、たとえば、人工知能における「エージェント」と呼ばれる研究分野において、関連研究会による合同研究会を組織するといった学会横断型のイベントも行っております。ぜひ、当研究会の動向に注目していただきたいと思います。

MI

■ 新年度企画
研究会活動紹介

CVIM

コンピュータビジョンと
イメージメディア研究会齋藤 英雄 (慶應義塾大学)
杉本 晃宏 (国立情報学研究所)

コンピュータビジョンとイメージメディア (CVIM) 研究会では、研究会名が表しているように、画像によるシーン解析・認識、さらに映像メディア解析処理など、コンピュータで画像を扱う問題を広く扱っています。研究会を毎年5回開催していますが、関連する分野の研究会と共催・連催しながら、いくつかの独自の取り組みを実施しています。

そのひとつが、チュートリアルシリーズです。ここでは、新しく話題になっている画像処理・解析・認識手法を取り上げ、単なる手法の解説にとどまるのではなく、その手法をどのようにして活用して実践的に研究に活かしていくかを聴講者に理解してもらうことを目的としています。すでに25以上のテーマについて行ってきており、毎回非常に好評を博しています。ここで発表された内容を拡張し、それをまとめてシリーズ本としても出版しています。嬉しい誤算として、このチュートリアル本を理解する

ための勉強会が若手研究者を中心に行われていて、この分野の若手活性化に貢献していることが挙げられます。

また、CVIM 研究会が主導して国際的に活躍している編集委員を集め、CVA という英文の論文誌を出版しています。このCVA 英文論文誌には、CVIM 研究会で発表された優秀な発表の中から投稿を推薦するなど、研究会と論文誌を連携させる取り組みを行っています。また、2013年からは、画像分野における国内最大のシンポジウムである、画像の認識・理解シンポジウム (MIRU) とCVA が連携することを試んでいます。具体的には、MIRU の査読論文部門では英文の論文投稿を募集し、それらの論文をCVA の編集委員会で査読を行い、その結果に基づいて、CVA への採否を決定すると同時に、MIRU のプログラム委員会がMIRU のプログラムを構成する、という仕組みを実施することになりました。この仕組みによって、MIRU での査読論文がCVA という学術論文誌に出版されることになり、国際的な発信力を持つことになります。また、MIRU の発表者の研究業績の向上にもつながると期待しています。

CE

コンピュータと教育研究会

角田 博保 (電気通信大学)

5月号で紹介いたします。

CH

人文科学とコンピュータ研究会

関野 樹 (総合地球環境学研究所)

「人文科学とコンピュータ研究会」では、学際的に研究を進めることにより、情報技術を活用した人文科学分野の研究や人文科学に関連する情報資源の記録、蓄積、提供を通じて人文科学分野へのコンピュータ応用を目指した活動を行っています。

年4回開催される定例の研究会のうち、毎年



5月に開催される研究会では学生セッションが開催され、その中で最も優秀な発表に「人文科学とコンピュータ研究会奨励賞」を授与しています。2012年は土山玄君 (同志社大学大学院) の「語の使用頻度の計量分析による宇治十帖他作者説の検討」が受賞しました。そのほかにも定例の研究会では、開催地の研究機関との共催で「地域研究と地域情報学」「地域の歴史文化遺産情報の保全」「新統合検索システムと研究情報資源共有化」「文字情報のデータベース化と連携の可能性」といったさまざまな特集・企画セッションが開催されました。また、年1回開催されるシンポジウム (じんもんこん 2012) は「つながるデジタルアーカイブ 一分野・組織・地域を

MI

■
新年度企画
研究会活動紹介
■

越えて」のテーマで 2012 年 11 月 17 日から 2 日間、北海道大学において開催されました。

今後も人文科学を含むさまざまな分野との交流を通じて、情報科学の分野だけではなし得ないような新たな研究シーズの発見や技術の応用に果敢

に挑戦できる場にしていきたいと思います。なお、2013 年は第 100 回の記念の研究会をはじめ、海外の学会との共催による国際シンポジウムなどが計画されています。最新の情報は Web ページ (<http://www.jinmoncom.jp/>) でご確認ください。

MUS

音楽情報科学研究会

平井 重行 (京都産業大学)

本研究会は、音楽とコンピュータとがかかわり合うあらゆる場面を活動対象とする学際的の研究会です。登録員は情報系研究者や音楽にかかわる企業の方以外に、作曲家や演奏家、コンテンツ制作者、さらに一般の愛好家まで幅広くいます。研究会の活動トピックとしては、学会の中でいち早くインターネット活用に取り組みしており、2012 年度からは各研究発表会を Ustream とニコニコ生放送で動画中継しています (自前で中継機材を保有・運用する国内唯一の研究会のはず?)。これは、よりさまざまな立場の方へ研究分野と内容に興味を持ってほしいという願いから、発表内容や質疑応答、議論、研究会の雰囲気などを公開して広く知ってもらうことが第一にあります。そして、音楽そのものが時間に伴うメディアで



あることから、研究結果および研究発表での説明そのものを動画で残し、より理解しやすい形で記録・共有したい、という意向もあります。生中継なので Twitter 併用などによりインターネット越しの質問や意見が会場で採り上げられることもあります。そして発表者は後でそれら質問や意見を確認できるとともに自身の PR にも活用できます。このように、我々 SIGMUS はインターネット全盛時代の学会や研究コミュニティ活動の新たなあり方を開拓しています! さらに、2013 年度は研究会設立 20 周年であり、本年度だけ研究発表会の参加費は無料にし、各回とも特別企画満載です。ぜひ、ご参加、ご登録ください!

Web: <http://www.sigmus.jp/>

Twitter: http://twitter.com/ipsj_sigmus/

Ustream: http://www.ustream.tv/user/sigmus_live
ニコ生 (学術チャンネル) : <http://ch.nicovideo.jp/channel/ch1024/>

SLP

音声言語情報処理研究会

伊藤 彰則 (東北大学)

音声言語情報処理研究会 (SIG-SLP) は、音声の認識・合成・対話など、音声の処理全般に関連するトピックスを扱う研究会です。毎年 5 回の研究会を開催しており、多数の会員の参加により活発な議論が行われています。SLP の活動で特別なこととしては、年 2 回 (7 月および 2 月) に温泉で合宿形式の研究会を開催しており、通称「温泉研究会」と呼ばれています。また、情報処理学会の他研究会や他学会と連携して、「音声言語シンポジウム」や「対

話システムシンポジウム」などの研究会連携企画を行っています。毎年の発表件数は 100 件前後です。

2013 年度は、SLP 研究会創立 20 周年にあたり、2014 年 2 月の研究会が通算 100 回の記念大会にあたります。この回は記念研究会を企画しており (もちろん温泉で)、これまでの歴史から未来への展望まで幅広い立場から分野全体を展望する企画を予定しております。

研究会開催状況などの情報は Web サイトで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

<http://sig-slp.jp/>

MI

■ 新年度企画
研究会活動紹介

EIP

電子化知的財産・社会基盤研究会

山下 博之（独）情報処理推進機構）

技術と社会との関係について考える

情報通信技術（ICT）は、今や私たちの生活や社会経済活動にとって欠かせないものとなっています。ICTの進展と普及は私たちに多くの便益をもたらしていますが、一方で、それを受け入れる社会制度が適時・適切に対応できず、技術と社会との間に不整合を生じているケースも見られます。

EIP研究会では、デジタル情報革命がもたらす社会的問題について、電子化知的財産および社会基盤の観点から、社会的、経済的、法制度的、技術的な側面から学際的に研究しています。したがって、研究発表会でも、あえて理系と文系とに分けるとすれば、文系テーマの発表件数が多いことが特徴となっています。

ここでは、このようなEIP研究会の最近の活動の中から、2つのトピックスを紹介します。

・「違法著作物ダウンロード刑罰化の影響と課題」についての議論

2012年10月1日に施行された改正著作権法によって、インターネットのサイトに掲載された音楽や映画等の違法コピーを、それと知りながらダウンロードすることが、刑事罰の対象となりました。この施行に先立ち、第57回研究発表会（9/14）に特別セッションを設け、この法律改正の影響と課題についての議論として、壇俊光弁護士（北尻総合法律事務所）による講演「ダウンロード刑罰化を

Winny 弁護団事務局長が語る」とミニパネル討論を行いました。壇弁護士の講演では、改正法が十分な検討や審議を経ずに成立してしまったこと、刑罰化による経済的なメリットの検証に疑問があること、処罰の対象が広範で不明確であることなど、法律上の問題点等が指摘されました。パネル討論では、情報社会におけるこのようなテーマに対し、技術者ももっと関心を持つべきであり、必要に応じて声を上げることが重要であるという問題提起が、パネリストからなされました。

・「日本におけるオープンデータの活用に向けて」と題する招待講演（庄司昌彦先生）

政府保有データの活用（オープンデータ）は電子行政の新たな潮流であるオープンガバメントを進める上で最も主要な政策として、政府は「電子行政オープンデータ戦略」をとりまとめています。第58回研究発表会（11/16）での講演では、世界最高水準とされる日本の情報通信基盤を活用し国民がITの恩恵を享受するためのカギはデータの活用にあるとし、国内外先進事例に基づき、オープンデータを具体的に進めるために、ポータルサイト、開発イベント（ハッカソン・アイディアソン）、アプリ開発コンテスト、仲介者・中間支援組織の活動、評価の可視化という5つの方策が示されました。

また、EIP研究会では、Facebook (<http://www.facebook.com/eipjp>) による情報発信を行っており、上記トピックスを含む活動内容を紹介しています。



MI

■ 新年度企画
研究会活動紹介

GI

ゲーム情報学研究会

田中 哲朗 (東京大学情報基盤センター)

コンピュータの歴史の最初期から、チェスなどの思考ゲームをコンピュータに実行させることが研究課題になっていましたが、ゲーム情報学研究会は、コンピュータチェスの Deep Blue が当時の世界チャンピオンのカスパロフを破った2年後の1999年から14年間活動してきました。

ゲーム情報学研究会では、ゲーム、パズル全般を扱っていますが、発足から現在までのメインテーマの1つがコンピュータ将棋です。2010年4月、情報処理学会が日本将棋連盟にコンピュータ将棋でトッププロ棋士との公開対局を望む挑戦状を送り、同年10月にコンピュータ将棋「あから2010」と清水市代女流王将の対戦が実現し、見事勝利をおさめました。プロジェクトの中心となったのが、当研究会のメンバでした。

コンピュータ将棋はトッププロを超える見通しが立ちましたが、研究会では他にもさまざまな面白いゲームを扱っています。囲碁のように人間のトップレベルにコンピュータプレイヤーが到達していないゲームや、大貧民等の不完全情報ゲーム、リアルタイムゲーム、robocup等の従来の思考ゲームの枠



「清水市代女流王将 vs. あから2010」対戦の様子

を超えたゲームを対象にした研究テーマだけでなく、ゲームのルールを与えられただけでプレイする general game playing のような挑戦的なテーマもあり、活発な研究会活動が行われています。

研究会では年2回の研究発表会とワークショップを年1回開催しています。毎年秋に箱根で2泊3日で開催しているゲームプログラミングワークショップ(GPW)では研究発表だけでなく、ナイトイベントでさまざまなゲーム、パズルが紹介されて人間同士でプレイしたり、将棋、囲碁等さまざまなゲームのコンピュータプログラムの対戦が行われているので、興味のある方はぜひご参加ください。

EC

エンタテインメントコンピューティング研究会

辻田 眸 (東京大学)

エンタテインメントコンピューティング研究会(SIGEC)では、新しいエンタテインメントを創造するためのエンタテイ



メント技術の研究、「面白さ」の基本要素を解明したり、評価法を確立するエンタテインメント性の研究、教育・エクササイズ・福祉などのさまざまな分野での応用を探るエンタテインメント化の研究に関する議論の場、情報交換の場を提供しています。

SIGECでは、エンタテインメントコンピューティングに関する研究に年4回の研究発表会および年



図-1 研究会の様子

1回のECシンポジウムを開催しています(図-1)。また、インタラクションなどの関連シンポジウムも共催・協賛しています。

こういったイベントのほかに、気軽にそしてできるだけ多くの人と議論できる「場」の提供を目指して、さまざまな取り組みを行っています。

MI

■ 新年度企画
研究会活動紹介

たとえば、公式 Twitter マスコットキャラクター（園田ティナ）を作り、発表内容や研究会の情報を分かりやすく発信しています（図-2）。マスコットキャラクターのティナがつぶやくことによって、議論の場が和んだり、EC 研究により興味を持ってもらえるのではないかと考えています。

また 2009 年には研究会に関する情報のある程度まとまった形で、分かりやすく提供し、より多くの方の研究会の参加を目指して、ニュースレターを発行しました。ニュースレターでは研究の中身だけではなく、普段論文を通しては知ることのできない EC 研究に携わる「人」、「組織」にスポットライトを当て年に数回発行しています。

さらに 2013 年 3 月に音楽情報科学研究会（SIGMUS）と共催して開催する第 27 回 EC 研究会



図-2 公式マスコットキャラクター 園田ティナ

ではインターネットを利用した研究発表のライブ動画中継を試行する予定です。

今後もさまざまな取り組みを行い、EC 研究会を発展させていきたいと思っています。より詳しい情報は研究会の公式サイトでチェックしてみてください。

<http://www.entcomp.org/sig/>

BIO

バイオ情報学研究会

渋谷 哲朗（東京大学）

バイオ情報学研究会は、2005 年にできた比較的新しい研究会です。バイオ情報学と総称される生命科学と情報科学の境界領域の情報处理的側面を中心にバイオサイエンス系の研究者も参加するかたちで研究成果を発表する場を用意することでこの分野の発展に寄与することを目指して設立されました。この研究会では、年間 4 回または 5 回の研究会を開催しています。毎回さまざまな場所で開催していますが、特に毎年 6、7 月頃に電子情報通信学会ニューロコンピューティング研究会と共催での沖縄開催などもあり、非常に活発に活動しています。さらにこの研究会では、研究会独自のトランザクションとして、Transactions on Bioinformatics を発行しています。このトランザクションは、バイオ情報学分野において日本で発行される数少ない英語の国際ジャーナルとして、日本のバイオ情報学研究において

重要な位置を占めています。過去には、国際会議論文を招待したこともあり、海外からの投稿もあります。ただし、このトランザクションに掲載するためには、原則としてその内容を SIGBIO においても発表すること（ただし掲載後でも可）、としています。

また、本研究会では、情報処理学会から授与される山下記念賞に加え、研究会独自の賞として SIGBIO 学生奨励賞も設け、この分野の若手の育成を目指しています。また、トランザクションは情報処理学会の論文賞の対象となりますが、研究会としても独自に SIGBIO 論文賞を設けています。なお、これらの研究会独自の賞は当研究会登録会員であることを条件（発表後手続きでも可）としております。

2013 年度は、新たにシンポジウムなどの企画も検討しています。これまでバイオ情報学に縁のなかった方でも、ご自身のご研究の応用先として考えることもできるチャンスを見つけることができるかもしれません。ぜひ、ふるってのご参加をお待ちしております。

CLE

教育学習支援情報システム研究会

竹村 治雄 (大阪大学)

教育学習支援情報システム (CLE, Collaboration and Learning Environment) 研究会は、コース管理システム (CMS, Course Management System) や e ポートフォリオシステム、教務システムなど、高等教育機関における教育・学習にかかわる基盤・応用技術に関する研究発表および実践発表を通じて、大学教育を支援する情報技術の発展に貢献することを目指しています。本研究会は、CMS 研究グループを発展させ 2010 年度から CLE 研究会として活動を開始しました。年 3 回の研究会開催に加えて、コンピュータと教育 (CE) 研究会と情報教育シンポジウム (SSS) を共催しています。また、2 年に一度の割合で FIT に企画セッションを提案する計画です。2013 年度は 5 月、12 月、2 月に研究会開催、8 月に SSS 開催を予定しています。インターネットが我々の社会を大きく変貌させたように、今教育の現場でも IT を本格的に活用する時代となりました。本研究会では、これらのシステムの開発、運用、利用者支援、利活用事例等さまざまな立場での議論を通じて、IT を用いて教育を改革する気持ちで幹事、運営委員一同が研究会の運営にあたっています。特



大盛況のポスター発表会場 (SSS2011)



SSS 特別講演 (SSS2012)

に情報教育シンポジウムでは、深夜にわたる研究討論など活発な活動が行われています。ぜひ一度研究会に参加してみてください！ 皆様の参加をお待ちしています。



MI

■ 新年度企画

研究会活動紹介

■